



Anthony Reid. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680, Volume One: The Lands below the Winds*. New Haven and London: Yale University Press, 1988, xvi+275p.

本書は、植民地期以前の東南アジア史に関するアンソニー・リード氏の研究の集大成であり、全2巻のうちの第1巻である。本書のテーマは、東南アジアの交易活動がもっとも活発であった1450年から1680年までの時代（つまり「交易の時代」）における東南アジアの物理的、物質的、社会的構造を描くことにある。しかも著者は、従来の東南アジア史研究とはかなり異なる接近方法を取り、これが本書を極めて野心的で問題提起的な労作としている。著者の問題意識は本書の構成に表現されているので、まず構成を示しておこう。

第1章 イントロダクション：「風下の地」（物理的ユニットとしての東南アジア、人的ユニットとしての東南アジア）

第2章 物質的福利（人口、農業形態、土地所有、道具、食事と食料供給、水とワイン、ベテルとタバコ、健康的な人々？ 衛生、薬、伝染病と風土病）

第3章 物質文化（軽い家屋、高貴な寺院、家具と明かり、身体の装飾、髪、衣服、織物生産と交易、金銀細工、職人の専門化、冶金術：権力への鍵——鉄、銅、錫、鉛——）

第4章 社会組織（戦争、労働力の動員——奴隷と義務——、裁判と法、性関係、若い花嫁？ 出産と繁殖力、女性の役割）

第5章 祭りと娯楽（劇場国家、コンテストと競技、劇場、ダンス、音楽、高い識字率？ 口承と記述文学）

上記の構成内容から分かるように、本書は全体としてブローデル (Fernand Braudel) 史学の問題意識、とりわけ『物質文明・経済・資本主義』第1巻¹⁾の「物質文明」を下敷にしている。その問

題意識のうち本書と特に関連の深い部分は、次の2点であろう。第1点は、全体史構築への試みである。伝統的な歴史記述は政治、経済、社会、文化などの諸領域を別個に扱い、ある地域社会の歴史をトータルに描くことはほとんどなかった。著者は「このように広範なアプローチは確かに、表面的なものになるか自明なものになる危険性が大きい」ことを認めながら、「専門主義は、大部分の住民にとって最も重要な歴史の諸側面を排除する、という、恐らくより深刻な危険をはらんでいる」(p. xiv) と主張する。さらに、地域的に広範囲にわたる東南アジアの全体史を書くためには多数の言語に通じているだけでなく、人類学、民俗学など多くの研究分野の知識を必要とする。もし、「全体史」という概念を厳格に考えるならば、これら全ての条件を満たす必要があるだろう。しかし、かかる厳格な意味での「全体史」を1人の研究者が書くことは不可能に近い。元来歴史研究者である著者は、これらの限界を十分承知しており、その欠陥を他の研究者による研究や翻訳文献を積極的に利用することで補っている。もちろんこれは理想的方法ではないが、本書のように野心的な仕事の場合、次善の策として許されるであろう。

第2点は、東南アジアを多少とも一体性をもった「世界」として描くことである。東南アジア史の概説書は「多様性の中の統一性」を強調することを忘れないが、現在までのところそれは標語に留まっており、「統一性」または一体性の実態が説得的に記述されてきたとは言い難い。著者は、支配者や外国人ではなく、できるかぎり庶民の日常生活様式に焦点をあて、当時の東南アジアが実態として1つの独立した世界であることを証明しようとする。これは、全体史の記述に具体的な内容を与えることにもなる。著者は、「交易の時代」の東南アジアは、共通の気候的、物理的、商業的プレッシャーにより、非常に同質的な物質文化を發展させてきた、とみなしている。上記のようなブローデル的問題意識は、チョードリー (K. N.

1400- 1800. Translated by Miriam Kochan. London: Weidenfeld and Nicolson, 1973.

1) Braudel, Fernand. *Capitalism and Material Life*

Chaudhuri) の『インド洋における交易と文明』²⁾ や、ブラッセ (Leonard Blussé) の『奇妙な会社』³⁾ にも表れている。

著者の意図がどの程度成功しているかを、個々のトピックについてここで評価することはできないが、全体として次の2点は評価し得る。まず、本書で扱われている時代の東南アジアが、一般住民の物質文化の観点から見るとかぎり紛れもなく1つの独立した世界であったことが説得的に検証されている。第2に、王国の興没や国際交易の背後で住民がいかなる生活をしてきたかが、生き生きと描かれており、本書は新鮮な東南アジア像を与えてくれる。例えば、「交易の時代」における東南アジアの女性は、アラブ、インド、ヨーロッパ、中国世界の女性と比べて一般に地位が高く、商業や農業で重要な役割を演じていたこと、それが日常生活の性関係における女性の積極性にも反映していることなど、女性の問題がかなり詳しく記述されている。しかし、キリスト教、仏教、儒教の浸透は、徐々に女性の相対的地位を脅かしていった。著者は、このような社会的変化を「交易の時代」の状況と関連させる。つまり、これら宗教の浸透自体が活発な交易活動の結果なのである。かかる歴史記述に対しては賛否両論あると思われる。しかし、少なくとも本書は東南アジアの歴史研究の幅を一気に広げ、豊かにしたと言えよう。ただし本書の最終的な評価は、以下の理由により現段階では差し控えたいと思う。

著者によれば、第2巻は第1巻で示された文脈における、「アナル学派がコンジョクチュールおよびエベヌマンと呼ぶことがら」に焦点を当てることになっている。アナル学派のいうコンジョクチュールとは、種々の状況の複合または中期の変動局面を、エベヌマンとは短期の「事件史」

を意味する。従って第2巻では、本書で記述された物質文化を背景として、東南アジア世界の変化、交易、出来事などが総合され、「交易の時代」が全体史として描かれるはずである。第1巻の評価や位置付けは第2巻が完結した段階で一層明らかになるであろう。

(大木 昌・八千代国際大学)

Colin Wild; and Peter Carey, eds. *Born in Fire: The Indonesian Struggle for Independence*. Athens, Ohio: Ohio University Press, 1988, xvii +215p.

本書は、もともとBBCのインドネシア向け国際放送の、インドネシア独立40周年記念特集番組として、1985年に37回にわたって放送された内容をまとめて出版したものである。最初1986年8月に、Gelora Api Revolusi (革命の火) と題してインドネシア語でグラメディアから出版されたが、このほど(1988年)それが英訳され、オハイオ大学出版会から刊行された。

放送も出版も共に、BBCのインドネシア＝マレーシア・セクションのチーフ、コーリン・ワイルド (Colin Wild)、ならびにイギリスのトゥリニティ・カレッジ教授でインドネシア史の専門家であるピーター・キャレイ (Peter Carey) の両氏により企画された。その内容は、19世紀末のアジアの民族的覚醒から始まって20世紀のインドネシア民族運動を概観したのち、日本軍政、独立宣言、独立戦争をへて完全独立を達成するまでのインドネシア民族運動史を、37のトピック (1つのトピックが1回の放送番組、また書籍では1章を構成) に分けて記述したものである。37のトピックを時代別に見ると、オランダ時代に関するもの14、日本軍政2、そして独立宣言ならびに独立戦争期に関するものが21で全体の半分以上を占めている。これらの大部分の原稿は各テーマの専門家によって書かれたものであるが、一部(13のトピック)は、歴史の当事者による証言 (インタビュー) という形をとっている。執筆に参加したのは、欧米 (アメリカ、オランダ、イギリス、オーストラリア)

- 2) Chaudhuri, K. N. *Trade and Civilization in the Indian Ocean: An Economic History from the Rise of Islam to 1750*. Cambridge: Cambridge University Press, 1985.
- 3) Blussé, Leonard. *Strange Company: Chinese Settlers, Mestizo Women and the Dutch in VOC Batavia*. Dordrecht: Foris Publications, 1988.

の研究者19名、インドネシア4名、日本1名（故永積昭東京大学教授）である。インドネシア人以外の執筆者が大半を占めている理由としてコーリン・ワイルドは、インドネシアの人々に外国人が解釈したインドネシア史を見てもらいたいためであると述べている。なお、執筆者の中には、アナ・アグン・グデ・アグン（インドネシア人で1945～49年に対オランダ外交交渉に参加）、ピーカール（オランダ人で日本軍政期は抑留所生活）、ジョージ・ケーヒン（アメリカ人で独立戦争期のジョクジャカルタに滞在）など、その執筆テーマの直接体験者も含まれている。また証言者は延べ10人で、アダム・マリク、ジャティクスモ、ワンサ・ウィジャヤ、トゥリムルティ、A. H. ナスチオン、マラ・カルヤ、スルタン・ハメンクブオノ9世、シャフルディン・プラウィラネガラらのインドネシア人の他に、イギリス人でありながら独立戦争に挺身したジョン・コースト、ならびに戦前からインドネシアに滞在し、軍政期はジャカルタの海軍武官府で働きながら常にインドネシア民族運動に共鳴していた人物として日本の西嶋重忠が含まれている。執筆部分も証言も共に1回の放送が20分、書籍にして平均5ページという短いものであるが、各トピックの専門家や体験者がその研究や体験のエッセンスをこの短い紙面で語り尽くしているわけで、その意味で非常に密度が濃いものになっている。

放送では、研究者の執筆部分は、インドネシア人アナウンサーによって朗読されているが、証言はすべて本人の肉声を流している。その意味では、死去する9カ月前に収録されたアダム・マリクや、昨年故人となったスルタン・ハメンクブオノ9世の証言などは、とりわけ貴重な記録である。さらに、書籍の中では出てこないが、放送ではその折々に、たとえばウィルヘルミナ女王が幾分興奮した声で、1942年3月にロンドンで行なった東インド陥落についての発表、日本の降伏を告げるイギリス首相アトリーやオランダ首相スヘルマホンの演説、さらにはスカルノの劇的な独立宣言や、大衆集会で熱烈な演説など、非常に歴史的に貴重な音声折りまぜられている。なおこの37回の放送内容はすべて10本のカセット・テープに収録されBBC

から市販されており、筆者もそれを聴いたものである。歴史資料としての「音声」のもつ価値というものをあらためて痛感し、感慨深かった。

さて、概要の説明はそのくらいにして次に、この企画の中に流れる歴史解釈のうちいくつか興味深い点を指摘してみよう。まずオランダ時代の民族運動に関する部分であるが、分析の視点をブダイ・ウトモ、イスラム運動、共産党、国民党というように運動の組織面から分けるいわば伝統的な方法の他に、文学、新聞、教育というようなファクターを媒介として運動の成長を分析する手法もとり入れられているため、記述が平面的、あるいは単に編年的なものに終わることなく立体感が出ている。しかし特に目新しい事実は提起されておらず、むしろこの企画のおもしろさは後半部分にあるといえるだろう。いろいろと論議の多い日本軍政期については、「インドネシアにとって苦渋に満ちたつらい日々であった」と認識した上で、「しかしながらこれは、過去との絆が断ち切れ、新しい思想が発芽した転換期であった」としてその史的 중요さを強調している。そして日本の影響の故に、さらにまた日本の影響にもかかわらずインドネシアの民族運動が大いなる内的発展を遂げた時期であったと評価している。独立戦争期に関しては、英語版の出版に際して追加されたピーター・キャレイの序論の中で解説されているように、独立は国軍中央の指導の下に民族が一体となって武力により勝ちとったものであるというヌグロホの史観ではなく、各地域の個別性や多様性、また民族内部の対立（いわゆる社会革命など）的要素を強調する見解が主流になっている（なおこのことに関しピーター・キャレイは、この企画が“一方的”な史観に片寄せよう生前ヌグロホ氏に執筆参加を求めたが得られなかった、と述べている）。このような見解に基づく地方史研究は、1970年代初めのジョン・スミールのバンドゥン研究以来欧米において革命期研究の主流になっており、1985年にオードリー・ケーヒン編でハワイ大学出版会から刊行された *Regional Dynamics of the Indonesian Revolution: Unity from Diversity* においてそのピークに達したものである。

学術書というよりは概説書というような性格の

書

著作であり、特に新しい事実が報告されたとか問題提起がなされたというようなことはないが、BBC という公共性の高い放送メディアが企画・制作したものとしては、かなり明確な特色も出ており、一読の価値はあろう。インドネシア民族運動

評

史を知る上でもっとも簡潔かつ網羅的にまとめられた入門書の1つであり、日本語にも翻訳されれば利用価値も高いのではないかと思う。

(倉沢愛子・摂南大学)